

◆ 仕口(しぐち)

材と材が、直角または傾斜(斜材)する方向に、二つの材が交差する木材を接合または緊結する工法。組みかたを仕口という。

木材の組合わせ加工方法には、ほぞ(柄)・胴付き・傾ぎ・大入れ・あり(蟻)・欠き込み・渡り・など多くの手法があって、普通これらの各種の手法(工法)いろいろと多種多様の組み合わせで、併用型や重用型にした工法が利用されている。

継手と同じく引張り・緊結・ねじれ・荷重に対して、これに応じる複雑な工法が施されるので、技能(匠)の熟練した技能が必要となる。

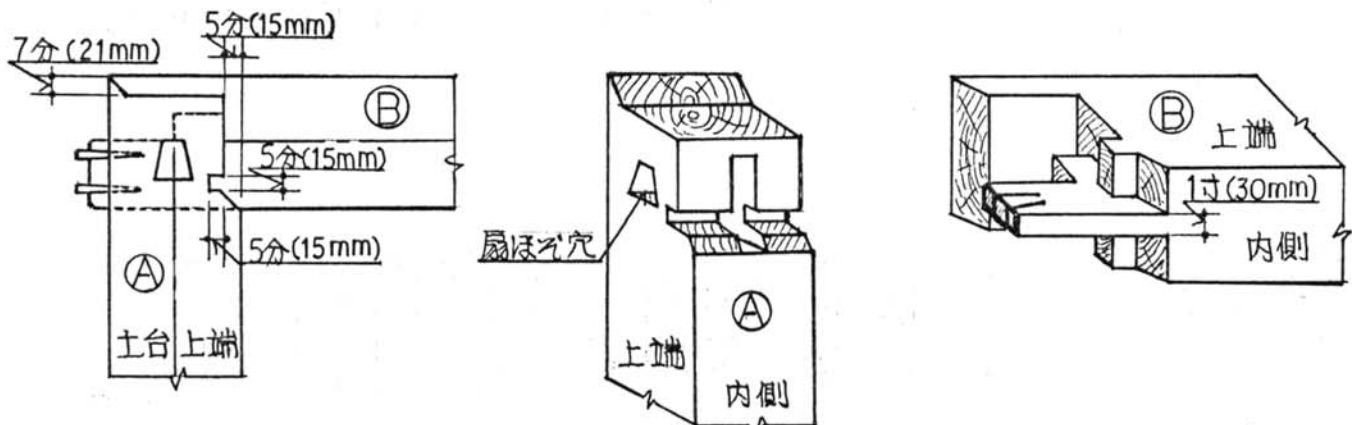
なお、これらの仕口は、加工(切込み)手法により締付緊結された手法や、木せん(柱)やくさび(楔)あるいは金物などを使用して補強する。また金物自体で継ぐことも多い。㊦ 木材仕口は金物併用型を使用し、各々の長所をいかした手法・工法によること。

これから仕口は、加工(切込み)等の工作を簡易化は必要なことだが、古来からつちかわれた木材の生きた使い方(木材の接合)いま一度と考へて、架構材の補強・増強をめざした工法を研究しなければならない。

● ほぞ(柄)の種類 いろいろ

○平ほぞ～長さにより短ほぞと長ほぞがある。ほぞ付材の面をうすぞこまたは胴付きという。○小根ほぞ～長ほぞに腰をつける。腰迄を大根という。腰上部を小根という。○重ほぞ(かさねほぞ)～腰部上部の幅を小さくする。○二枚ほぞ。○四枚ほぞ。○輪なぎほぞ～形状は三枚ほぞに見える。○扇ほぞ。○ありほぞ。○だぼ～太柄・駄柄。○きばほぞ～大ばりと小ばりの仕口。○しゃくしほぞ。○地獄ほぞ～ほぞは平ほぞ。ほぞ穴は底を広くあり形とする。ほぞはくさびによってあり形のほぞとなる。一度差し込むと、ふたたび抜けないので、地獄ほぞという。○くら掛けほぞ～流れほぞとよく似ているが、輪ないだ形となる。○流れほぞ。○えり輪ほぞ。

★すみ留めほぞ差し。柱のほぞ穴は、扇ほぞ穴である。



㊦一般的に墨付(工作上)上の慣習では、使用材の大きさにかかわらず、1寸(30mm)、7分(21mm)～(裏尺の5分)、5分(15mm)など、すなわち、さしがねをうまくつかわれている。